

自由な心と 感じる心があれば 人生は豊か  
(葉祥明 2009 『三行の智慧—生き方について』)  
花を支える枝 枝を支える幹 幹を支える根  
根はみえねんだなあ (相田みつを)

五月晴れの休日、父母の日のプレゼントにより家族で「三大ヴァイオリニスト・コンサート」に行った。東京フォーラムのAホールは5000人の聴衆で満員であった。ぼくはヴァイオリンの音色、楽曲演奏に大いに期待していた。ところが、開演されるや、アメリカン・アイドルをものぐ演出で、まぶしい光、うるさい音、私的なトーク、ヴァイオリンの音色など楽しめはしない。目も耳も開けておられず、ついに頭も心も痛くなったので、10分も置かずして、ホールから逃げ出した。せつかくのプレゼントなのに、申し訳ないと思ったが、我慢していたら、気が狂って叫びそうで、さらに、3日間は寝込むだろうと思った。コンサートが終わるまで、家族を待つ間、美味しいビールを飲んで気を静め、骨董市、版画展、美術館などを巡った。過剰な演出などまっぴらだ。大多数の聴衆であるご婦人方はトークショウを楽しみにしているのだろうが、ぼくはヴァイオリンだけが聞きたかった。

ぼくは自然に近い場所に暮らし、生きていたい。植物の色香、畑の土の匂い、むらの農道、バザールの喧騒、美味しい手料理、人びとの笑顔が好きだ。ビール造りの知人の家を訪ねた。彼はピーボ（キビの発泡酒）を醸してくださった方だ。畑のさらに奥、山間の谷津を詰めていくと、欧風の美しい家があった。周囲はイングリッシュ・ガーデンでたくさん花々とハーブが植えられていた。広い居間で、彼の醸したビールと、妻女の手作りの昼食をいただいた。素材はすべて、有機無農薬の自家製野菜だ。居間の大窓は額縁のように掛かり、対岸の森を背景に、バタフライガーデンを中心に花々が展開しており、すばらしく濃い景観を抽出している。私の好きなもののほとんどがここにあった。ご夫妻の自給知足ぶりに共感し、おもてなしに心もくつろいだ。

自然物は適応進化を一時も止めはしない。この先真文明の時代の中で、移行の順応を続けてきた。現代の消費文明の中にも、自然物は適応して、新たなニッチを求めている。山から、シカ、サル、クマ、イノシシ、野生動物たちが人里に降りて作物を奪い、街に出没して人を襲う。彼らばかりではない。巨大都市と大陸間交通の文明に順応して、カ、ゴキブリから、病原菌まで世界中の都市にも移動して定着している。自然は公正だ。自然現象に備えなければ人間は守れないし、野生と戦わなければ共存も共生もない。人間の場合は意志ある選択が文化的進化によって、ある程度できる。野生獣のようにひたすら自然選択されるばかりではない。

今、ぼくは大人になったので、青少年のころのように、人の生き方を全否定も全肯定もしない。人が生き方を磨くには課題を見つけて、さらに良くなるためには、部分肯定と部分否定がいる。足るを知る解脱は最終的な目標だが、部分の不足を埋めるか塗るのは、それを課題として見つけて、さらに地道に改善努力を続けることだ。人の間を遊泳して名利をつなぐようなことは、ぼくはもう久しくしてない。名利を得れば、意見を聞いてもらえる。贅沢な暮らしができる。でも失うものやいらぬものも増える。自由や時間を失う。世間に迎合するようになる。自分がなくなる。無名で好きなことをしたらよく、世間の評価、毀誉褒貶を気に留めないのが良い。ボランティアは自ら得た労賃を寄付して公共の仕事をする。行政は税金で職業として給金をもらい、公共の仕事をする。企業は客に品物やサービスを提供して、あるいは公共の仕事をして、見返りの金を受け取る。客は金を支払って、サービスを受ける。他人の知足は思い測れないが、それぞれに、こうした人や仕事は必要だ。

世界市民は、自由、平等、友愛を求める自律した個人である。この個人は伝統的には家族、民族の属性をもち、近代的には地域市民、国民の属性をもつ。ただし、現在は移民、難民、無国籍など、困難な状態にある人々も多数いる。それでも、意思して世界市民であろうとする人はいるだろう。世界市民は個人がそうであろうと意思するものであって、各地で増加しているが、まだまだ相対的には少数かも知れない。

仕事は生きるための営みだ。名声や金銭を得るための職業ではない。名利がなければ行き難い社会ではあるが、無くても生きられるし、無い方が人間として自由・平等・友愛に生きられる。とはいえ、この世では相応の金銭や名利がないと、自由・平等・友愛も得られないこともある。どの程度で知足するかが個人の教養の程度だ。不審・不信の世のなかでは教養は低下する。

希少を尊ぶことはよし悪しである。現場に生きている、希少の当事者からすれば、なにゆえ希少に追い込まれたのか、それでも生きていることの意味が大きいことを語るべきである。希少を良く言うノスタルジーは現場の当事者のものではない。そうでないからこそ、同情するかのように悲壮にも美麗にも描けるのだ。

各地の人々の幸せや不幸にも、心情を寄せる人でありたい。静かに、安心して、自然に沿って、幸せな人生を過ごす別の暮らし方はある。それでも一方で、現代的暮らしには解決すべき不幸は無数にある。台風、洪水、竜巻、津波、地震。事故、事件。紛争、戦争、差別、貧困、飢餓。公害、汚染、汚職、失業。民族、宗教。

権力や権威の支配手段としての、宗教の強制が信仰を阻害する。アニミストは自然に沿った信仰だ。黒魔術には合意はしないが、祈りの儀式には賛意をもっても良いのではないのか。自然との関わりを失い、生命ある糧を頂く感謝を忘れ、尊大になることは、生き物としての人でなしだ。謙虚に他種の生命を育てていただく自給知足こそ、再生・

復元の拠り所だ。

黙っていれば、善事は掠め取られ、悪事は暴かれない。人の事績を掠め取り、自己の名利を得るため、陰徳は消し去られ、虚偽がまかり通る。忘却の穴（オーウェル 1948）に放り込まれていく怒り、悲哀に悩まされ始めた。名声を求めてはいないが、個人人生をかけてなしたことが、ささやかなこととはいえ、身近な人々にとっても、忘却の穴にするりと投入されている。知足すべきだが、敬意を示されないことに、不条理な悲哀を感じる。だから、地位を得た人々は権力や権威にしがみついているのだろう。でも、生涯、地位や名声に無縁の市民であったなら、そんな悲哀は感じないのだろうか。最初から諦めたのか、悟っているのだろうか。悟りを得て、ドロップアウトしたのだろうか。忘却の穴というのは、現代文明の基本的システムに組み込まれている。まず個人に、地域社会に、学協会や政治団体のような組織にも、行政・司法機構にも、結果的には大小の歴史にも……。

あまりに複雑な社会なので、単純な忘却かもしれないが、記憶からあふれ出る。心理的負担を減らすために忘れ去りたい。意図的に忘れることにして、無かったことにする。集団内で黙殺する。いじめの本性は意識的無意識的に機能している。身近に機能すると、神経的につらい。厭世的になり、引き籠りたくなる。個人のうちにもこの穴はある。事績を記録しておかないと、忘れたいことも忘れたくないことも、忘れてはいけないことも、何もかもこの穴が吸い込んでいく。これで楽になることもあるが、自尊心が損なわれることもある。事実がすべての基礎だ。

オーウェルが『一九八四年』を書いていた 1948 年には世界人権宣言が採択された。K. M. ガンジーが凶弾に倒れた。公的歴史が消し去ろうとも、黙殺しようとも、個人史、地方史の中に、残しておきたい。残しておけば再発見されるやも知れず、後世への最大遺物として、未来世代の思索に役立つかもしれない。歴大の著作のうち、そうした優れた書籍が、現代人に価値観形成の基盤を与える。古典は大事だ。アナログの本を無くしてはいけない。デジタルは改竄される、すぐに消し去れる。

人間には様々な、細々とした欲望が心の深層に蠢いている。それは善悪以前の、剥き出しの欲望である。これらの欲望の実行を制御するのは人間として順化してきた社会的行動、基盤の文化である。これは心の構造のどの部分か。剥き出しの欲望の発現は、抑制、促進ともに制御する心の構造を構成する微細部品、たとえば螺子や発条、あるいは振り子や磁針、これらの緩みと緊張、歪みや捻じれによる衝動に基づく、非文化的、非社会的な異常行為である。この発現は、心の構造の発達、すなわち文化的進化によって制御されるものだが、退行期にある現代文明が欲望を刺激し、即自・即時的な発現を促進する。即自・即時的に面白い、欲しいを制御できずに、行為し、自他を傷害する。

ほとんどの人が、小さなスマホの仮想世界の中で過ごしている。少し前まではテレビの中がほとんどであったが、スマホが架空・仮想、嘘世界の伝道物のアイドルになってきたようだ。便利な仮想現実のゲームは暗い欲望を代償するが、境界を見失った心は制御できずに行為する。

オリンピックでの、才能あるアスリートの躍動する姿は素晴らしい。しかし、スポーツは万人が自ら楽しむもので、特別な才能の持ち主を観戦するだけのものではない。莫大な税金を特別なことに偏重して使用するのはいくはない。文化的生活が市民に満たされることが優先されるべきだ。素晴らしいものを見て楽しむことと、自ら行って楽しむことは同等に、あるいはむしろ後者がより大切だ。自ら行わないで、見るだけで、同一化して仮想現実に入る便利は人間を生物的にも文化的にも退化させる。

他の近・現代人の意見も聞いてみよう。赤堀（2012、2015）は次のように語っている。これでは八雲が懸念した西洋かぶれの青年達の政治と変わらない。新自由主義で社会がおかしくなっているところに、さらに国家主義の亡霊が復活してくることを心配しないといけなくなってきたのか。・・・しかし、一方において国民が変わりつつあるのも明らかだ。例えば問題解決のためのNPOやボランティア活動も増えてきている。・・・なぜ、一介の元ビジネスマンが、こんな大仰な題で発言できるのか。それは今の政治家、経済学者が経済の現場を見ていないからである。専門家も必ずしもあてにならない。社会全体を見渡さないからだ。現場から社会全体を見渡すにはビジネスマンのほう方が適している。研究者でない彼の論拠は不十分だが、全体を見ての論考は傾聴すべきだろう。小泉八雲 {注：パトリック・ラフカディオ・ハーン、ギリシア生まれのイギリス人、日本に帰化}、夏目漱石、田中正造らを引用して、直観的な論考をしている。

・・・八雲は西洋文明の本質を知性と捉え、それからもたらされる負の側面としては利己主義の伸長を最も問題視するとしている。西洋の優れているのは、ただただ知的な点にある。それに較べて日本はその点はまだこれからのしても、徳においてははるかに優れている。・・・日本にはまず第一に、無私無欲、自己犠牲精神がまだ生きている。この精神を支えるものとして、神道、儒教の教えを挙げる。明治維新において、天皇のもとに国民を結集させたことは、明治政府の懸命な策であったと評価する。・・・近代国家で政教一致の政体をとる国家は世界で他にない。

おなじ「自然」を見るにしても、われわれ西洋人は、東洋人が見るような具合に「自然」を見ていない。・・・われわれは、東洋人ほど、リアリスティックには見ていないし、また、そう「自然」をくわしく知ってもいない。・・・われわれは「自然」を擬人化して眺めるからである。・・・西洋人の、美的感受性の資源ともいべきものは、そもそもの太初からして、人間美の認識にあったのだろう。

一様に融通性に富み、しかも物にすぐに感動しやすいこの国民は、大いなる目的を目

指して、挙国一致で邁進してきたのである。・・・日本の国民性のうちに、利己的な個人主義が比較的少ないことは、この国の救いであり、それがまた、国民をして優勢国に対して自国の独立をよく保つことを得せしめたのである。

西欧の教育の目的は、個人の能力と個人の性格の養成、つまり力に富んだ独立人を産み出すことにある。ところで日本の教育は、外見は西洋流でありながら、だいたいにおいて、従来も、またこんにちも、つねにまったく反対の方式に基づいて行われている。その目的は、個人を独立行為のために訓練するのではなく、個人を共同的行動のために、つまり、厳格な社会の機構のなかに、個人が正しい位置を占めるのに適するように訓練してきたのである。

しかし、日本の若い世代の諸君は、今のところ過去の日本を軽蔑している風があるけれども、かならずいつの日にかは自国の過去を、ちょうどわれわれ西欧人が古代ギリシアの文明を回顧するように、回顧する時がくるであろう。簡素な楽しみを楽しむ能力を忘れたこと、人生の純粹な喜びに対する感性を失ったこと、それを反映している今は滅びたすばらしい芸術を忘れたこと、この忘却をいつかは哀惜する日がくるであろう。

次に、赤堀は夏目漱石を取り上げて、{漱石は} 近代の個人主義の伸展は、一方において利己主義や我執を生む。しかし西欧の思想ではこれらを克服できないことを見抜き、この問題の解決を生涯の課題にすることを決意した、と記している。漱石は悟りを得ることを願っている。そして既存の宗教とかに頼らず、自分の考え、自分の力で達成することを考えている。・・・一九一四年（大正三年）に学習院大学で行った「私の個人主義」という講演も有名である。漱石はここで二種類の自己本位を述べていると思われる。一つは自分に疑問や迷いがあったら徹底的に詰めてみよ、自分でやって見なければ何も分からない、勇気を出して進んでみよということを述べている。もう一つは、自分の取り組むべき生涯のテーマが決まったがそれは、・・・西洋文明の受容とその同化を自分の頭で考えるということまで進むのであろう。・・・

第三に、シャカの縁起の説、四諦の説および八正道を引用して、論考している。この結果、赤堀は、投げかけられた問題が現在でも解決されたとは言えない。ただ近代文明の限界が明らかになってきたと言えるだろう。近代文明は人間が自然を支配できるという人間中心主義、進歩の思想、科学技術万能主義、経済効率至上主義に基づいている。そしてこの考え方を支えているのが、近代理性主義という思想である。

日本では昔から国民は統治する対象にすぎなかった。それによって国民の側にも権力になびく大勢順応主義や、責任を回避する事なかれ主義がはびこった。個人の生き方としては立身出世主義が植え付けられたのではないだろうか、と論議を進めている。

さらに、D. マハリッジと田中正造を引用している。

{マハリッジは} そして現在自分達が頼れるのは自分達自身とコミュニティだけで、これを再生しなければならぬと言う。暮らし方も昔のように質素にしよう。借金に依

存した消費体質を改めようと言う。空き地の都市園芸が盛んになっており、自家野菜による自給自足ブームが起きている。そして、それは単に生活の助けというだけでなく、大地とのつながりと、そこから生じる心の安らかさを生んでくれる。そしてまた仲間が見つかることから自分はコミュニティの一部だということを自覚させてくれる。このような自発的なコミュニティ作りに、私達の未来が託されていると言う。

{赤堀} アメリカ社会のひどい現状を見ると、とてもそんなこと{注：資本主義の勝利}を言えたものではないだろう。貧富の極端な格差をもたらし、労働条件の最悪化を招き、公的なものまで全てを金儲けの対象にしてしまった。・・・トリクルダウンによってだんだん下の相に富が移転していくなどという理論はまったくのウソかごまかしであることが明らかになった。またサブプライムローンによるリーマンショックによっても理論の破綻が明らかになった。・・・第二次世界大戦を引き起こした恐慌を避けるために考えられたケインズ流の修正資本主義を否定してしまったのだから、そう言うことが起こるのは当然のことである。・・・一番しっかりしていたのが北欧福祉国家と言えるのではないか。その競争力がどこから生まれるかという、自主性や想像力の尊重、構成や平等への信頼、そしてそれらを育む教育の重視ということであるという。

{注：田中正造文集} 被害民七百名余は被害地から徒歩で大挙出京し、政府各省、議会、新聞社などに鉍毒の惨状と鉍業停止を訴えた。これが第一回の「押出し」で、以後大挙請願の「押出し」は一九〇〇年二月までに四回行われた。これが効いたのか、明治三十年に内閣は足尾銅山鉍毒事件調査委員会を設置し、古川市兵衛に鉍毒予防工事を命じた。・・・このころから正造は政府に失望していく。藩閥政府は自己と国家を混同している。一国の基礎は国民一般の上に確立しなければならないと言っている。

しかしこの請願行動{第四回押出し}は途中、利根川北岸の川俣にて、憲兵・警察により大弾圧を受けてつぶされた。相当数の負傷者、逮捕者が出た。正造はすぐに議会において、「亡国に至るを知らざればこれ即ち亡国の儀につき質問書」を提出し、抗議の趣旨演説を行った。・・・政府、議会、政党に失望した正造は翌明治三十四年十月に衆院議員を辞職する。正造の最後の拠り所は天皇だった。・・・後の軍国主義の時代に田中正造は義人として祭り上げられ軍国主義の宣伝に利用された。しかしその主張は全く違ったものであったことが以上の記述で明らかだろう。・・・農は土なり、土は不動産なり。また土より生ずるものを食す。即ち土を食ふ。町村自治の外、日本を守るものなし。・・・

## 文献

赤堀芳和 2012、『我を超えること—近代理性主義の克服』、講談社ビジネスパートナーズ。

赤堀芳和 2015、『共生の「くに」を目指して—働く者が報われる社会に』、講談社エディトリアル。